

エクフラシス／ブリューゲル

「雪中の狩人」(1565)を読む 20 世紀の詩人たち

遠藤 健一

エクフラシス (ekphrasis) とは、現在では、視覚芸術作品、特に、絵画を描いた詩のジャンルの呼称として流通している。本講義の目的は2つある。(1) エクフラシスとして括られる詩の類型モデルを提案し、(2) その提案モデルを準拠枠として、16 世紀ネーデルラントに生きたパーテル・ブリューゲル (Pieter Brueghel de Oude 1525/30-1569 年) の「雪中の狩人」 (“*Hunters in the Snow*”, 1565, Oil on canvas, 46 inches x 63.75 inches. Kunsthistorisches Museum, Vienna.) をエクフラシスの対象とした 20 世紀の 3 人の英米詩人の 3 編の詩を再読することである。(1) については、近年のナラトロジーの知見を援用したモデルを提案する。(2) で扱う具体的な詩作品は、ウォルター・デ・ラ・メアの「ブリューゲルの冬」 (Walter de la Mare’s “*Brueghel’s Winter*”), ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの「雪中の狩人」 (William Carlos Williams’ “*The Hunter in the Snow*”), ジョン・ベリマンの「冬の風景」 (John Berryman’s “*Winter Landscape*”) である。

エクフラシス詩の類型モデルは、以下のフレーム化のモデルとして提案される。エクフラシス実践にあたって、詩人=語り手が、(a) 絵画として、つまり、絵画世界のフレーム化までもを含めて対象とする場合と (b) 絵画に描かれた世界自体を対象とする場合とがある。(a) の場合、あくまで絵画テキストとして描写するものの、さらに、二つの場合が考えられる。(a-1) 詩人=語り手が鑑賞者の立場として描く場合と (a-2) 制作者の立場として

描く場合である。前者にあつて、既にフレーム化された絵画テキストを絵画テキストとして描写するのに対して、後者にあつては、フレーム化を含む画家の制作過程そのものが描写の対象となる。この最も知られた最古の例が、ホメーロスの『イーリアス』の第 18 章の「アキレウスの盾」の描写である。ホメーロスは「アキレウスの盾」の描写をヘーパイストスによる「アキレウスの盾」の制作過程を報告することによって果たしている。(b) の場合、絵画テキストとしてではなくそこに再現表象された世界自体が描写の対象となる。つまり、絵画として描かれた世界を、絵画として描かれたことをあたかも忘れたかのように、世界そのものとして描写するということである。この場合、絵画世界を切り取るフレーム化は認められない。

ウォルター・デ・ラ・メアの「ブリューゲルの冬」は (a-1) に該当する。詩人は、画家の生の秘密を明らかにすべく、「雪中の狩人」の細部を、遠景、中景、前景へと、フレーム化自体へも言及しながら描写していく。しかし、「ブリューゲルの冬」と題されたエクフラシスから、わたしたちは、ブリューゲルの一枚の絵画を前にして、遠景、中景、前景にと細部に拘りながら鑑賞し、そして、画家の生の秘密をなお明らかにできなかったことに慨嘆する詩人デ・ラ・メアの姿を目の当たりにすることになる。

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの「雪中の狩人」は (a-2) に該当する。詩人は、画家の制作過程を追体験するかたちで、フレーム化への言及も含めながら、遠景、前景左、中景を描写の対象にする。そして、画家の最後の一笔こそが前景右に配された「冬の立ち枯れの藪」であると想像する。これは、20 世紀のイマジズム運動を担った詩人が早過ぎたイマジスト・ブリューゲルと邂逅した一瞬とでも呼び得る瞬間である。

ジョン・ベリマンの「冬の風景」は (b) に該当する。詩人は、狩りから

エクフラシス／ブリュゲル「雪中の狩人」(1565)を読む 20 世紀の詩人たち

戻った男たちが崖上から町を望んでいる日常的な光景に、来るべき戦争において兵士として出征・帰還する男たちがいずれ似て非なる荒廃した町を眼下に収めることを予兆する。そして、同時に、詩人は、この光景に、1930 年代のヨーロッパの戦間期の恐怖と不安とを併せ重ねる。ベリマンの想像力は、ブリュゲルの「雪中の狩人」を契機として、時代と自分の不安と恐怖を、彼の「冬の風景」に体现したと言える。400 年間の時空を超えて、戦争の狂気と暴力に蹂躪される卑小な人間存在にまつわる物語を、画家ブリュゲルの思念と共振しつつ、この詩人は紡ぎ出したということである。

最後に、レッシングの『ラオコーン』以降にあって、つまり、姉妹芸術としての詩と絵画の関係が途絶されて以降、「物語性」というナラトロジー起源の新しい概念が、再び、詩と絵画の関係を連携させ得るのではないかということをも、併せて、示唆されている。